

書 法語

満優抄

書家 ながた 永田 かんおう 灌櫻 × 蓮照寺住職 まつおか 松岡 まんゆう 満優



紙本墨書 35.5×24 cm

【ありがたい ありがたい】

沢田ミネさんの言葉

全焼した本堂を前に私が立ち尽くしていると、

「本堂も庫裏も焼けて、こんなお寺に満優さんに入ってくれなんてとても言えない。どこか、よそを探したらいいよ。でもねえ、私は満優さんがきてくれたことで、まるで天から息子が降ってきてくれたようで…。私はあなたと出会えて幸福でした」

20年前のこと、私が現在住職を務める蓮照寺に入寺を決めた一言でした。沢田ミネさんの言葉です。

私がお寺を初めて見に行った時、小さな本堂と庫裏をぐるっと見回して帰ろうとすると、境内で草むしりをしていたミネさんの姿が目に入りました。ブツブツ何か言いながら草を引いているおばあちゃん。何を言っているのかと近づいて耳を傾けました。

「ナンマンダブ、ナンマンダブ…。有り難い、有り難い…。私はきよとんとしてしまいました。お念仏はわかります。あとの「有り難い」は草むしりのことなのか？ しばらくしたある日、ミネさんに聞いてみました。すると「阿弥陀さまのお膝元で草

むしりさせていただき、こんな有り難いことはないよ」と恥ずかしそうに答えられました。それでも私は理解できず、小さな寺だし入寺もどうしようかと思いつつ、自堕落な生活を送っていました。そんなある日、本堂・庫裏全焼の知らせがあつたのです。「あなたと出会えて幸福でした」。そんなこと言われたことなどない。私は瞬間的に「沢田さん、このお寺を継がせていただきます」と答えていました。

ミネさんには家族もお金もなく、不自由な体で一人暮らし。でも、誰よりも尊いものをもっていました。それは、この私が救われているという「信心」。今すでに阿弥陀さまの手の中にいるという自覚。どんな人生であろうとも、沢田ミネ一人がために必ず救うとよび続けてくださるお方がある。その頼もしい真実の光に照らされている人でした。だからこそ「有り難い」中に生きることができたのです。

「ミネさん、幸福なのは私のほうでした」。これが私のお念仏との出あいの一歩となりました。